

明倫短期大学学会報告

明倫短期大学学会月例研究会抄録

明倫短期大学学会月例研究会は、平成15年4月よりスタートした。本年は4月27日の第19回(通算102回)から、10月26日の第24回(通算107回)まで計6回開催されたことになる。

平成9年11月に歯科衛生士学科研究会の形で第1回研究会が開催されてから丁度10年となった。その間、平成12年には歯科技工士学科を含めた明倫短期大学研究会へと拡大し、平成15年には前年の12月に発足した明倫短期大学学会の月例研究会となったのである。一時は月2回、年に17回も開くなど学内学会を目指して研究会が大学の研究発表の中心となっていたが、学会発足以来は月1回、年6回開催が通常のペースとなっている。

時あたかも明倫短期大学は10周年を迎えたが、これからの大学の将来を考えると夢は大きく膨らむように思う。学内学会とともに、月例研究会の更なる発展を祈るものである。

(文責 歯科衛生士学科 福島祥紘)

第19回(通算第102回): 2006年4月27日(木)

(座長: 下河辺宏功)

咀嚼行動と口腔機能 —新潟大学大学院における研究の総括—

本間和代(教授, 歯科衛生士学科)

2001年4月、新潟大学大学院 医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻 顎顔面再建学講座 摂食機能再建学分野に社会人大学院生として入学し、2005年3月までの4年間、顎運動、咀嚼行動と口腔機能等について勉強し、「自由咀嚼と片側咀嚼の機能的差異の検討」を研究テーマに学位論文をまとめた。4年間の研究の取り組みと学位論文を中心に紹介した。

研究の歯科補綴学意義: 個性正常咬合をもつ者に、ピーナッツを咀嚼させ、自由咀嚼と片側咀嚼における初回嚥下までの咀嚼回数差と初回嚥下直前のピーナッツ粒子の大きさについて、顎機能状態との関係を追及した。その結果、自由咀嚼は片側咀嚼に比較して、咀嚼回数が少なく、咀嚼能率が高いことが示され、自由咀嚼の有効性が示唆された。左右側歯列を使って乗り換える自由咀嚼を可能にするため、欠損歯列の補綴修復が重要であることが明らかとなった。

第20回(通算第103回): 2006年5月24日(水)

(座長: 花田晃治)

本学歯科技工士学科の就職実態調査 (全国歯科技工士学校との比較)

相馬泰栄(講師, 歯科技工士学科)

本学科生の進路指導を目的に平成14年度から17年度までの求人および就職状況を全国歯科技工士学校と比較した結果、求人数は全国的に増加したが、都市部に集中した。また、求人倍率も本学科より高率であった。本学科の特徴として県内の求人数が全体の40%であった。卒業生の約80%が県内出身者で、県内出身者の87%が県内に求職を求めたが、希望者の約67%しか対応できなかった。その為、比較的求人の多い近県での広報および求人活動を充実する必要があるとの結論に至った。

リハビリテーションに係る 診療報酬の改訂とその影響

大平芳則(助教授, 歯科衛生士学科専攻科)

リハビリテーションに係る、平成18年4月の診療報酬改定について報告し、それが及ぼす影響について考察した。主な考察点は以下の通りである。

1) 診療報酬を算定できる訓練について、発症または増悪からの日数制限を設けたことは、不適切な訓練を避けるという点で意義がある。2) しかし、そのため患者が十分な訓練を受けられない。3) 集団療法が削除され個別療法のみとなり、集団訓練固有の目的を果たせない。

第21回(通算第104回): 2006年6月22日(木)

(座長: 福島祥紘)

歯科技工技術の変遷 ～被覆歯冠の復元～

藤口 武(助教授, 歯科技工士学科)

歯科用材料である印象材・鋳型材などが開発され、歯科医療用修復物の製作工程が劇的に変化し、より寸法精度の高い修復物を製作できるようになった。

しかし現在に至るまでには多くの先人が考案した歯科技工技術の変遷の歴史がある。

本研究では過去の歯科医療用修復物の製作法を後世に伝承するために、現在ではほとんど見られなくなった被覆歯冠(咬合面圧印金冠・前歯部圧印金冠・臼歯無縫冠)を過去の技術を用いて復元した。